
—ヨーク・ラブストーリー/エピソード15:男の中の男 (Express Yourself)

栗須じょの

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ゴーリーク・ラブストーリー」Hピソード15・男の中の男（

Express Yourself）

【ZPDF】

Z0320G

【作者名】

栗須じょ

【あらすじ】

ひょんなことから会社の同僚と親しくなったティーン。彼らとの付き合いは、ポーカーゲームにはじまり、葉巻とビール、果てはストリップ・バーまで範囲が広い。学生時代から男の友人を多く持つことのないティーンにとって、それらはすべて新鮮な体験。“男っぽさ”と縁のない彼は、この“男っぽい遊び”についていけるのか？

(前書き)

いわば 一話完結のシリーズ物 につき、ヒプノーシード第1話から
お読み頂けると分かり易いと思います。
連載はまだまだ続きますが、本作品においては完結しています。

【男らしき】（形容詞）

定義：男であると思える様子。体格・気質や行動・態度などにおいて、男性が持つべきと考えられている特質を備えていること。

【マッチョ】（形容詞）

定義：男らしい様子。男らしさ。特に物理的な強さ、勇気、攻撃性。筋肉美を誇る男性。

北米版の英語辞典によると、“マッチョ”という単語には、“男らしい”という単語で説明がつけられている。（ちなみに“マッチョ”はスペイン語だそうだ）。しかし、おれとしては、このふたつを同じような意味で使うことは、まずないと言つていい。明確な定義づけはできないが、感覚として違いがあるのは皆も感じているはず。特にゲイの間では、前者は褒め言葉、後者は嫌味としての用途が多く、使用の際にはことさら注意が必要だ。

似ているようで違うこの言葉。字面で見れば一目瞭然だが、自分がこの定義のどちらを生きているかと問われれば、そこに明確さを持つのは、男としていささか難しいこと。自らの男性性について問い合わせたい衝動にかられるのは、なにもローマンに説教されたときばかりではない。それは日常、たとえば午後のオフィスなんかでも得られる種類の問答だ。

「おおい、なんだこりや。いつたい誰がこんなことを
「ホール機の前で大声を張り上げているのは同僚のジェドだ。彼は
ウチの会社では、かなり“マッチョ”な部類の男。今日も自分のナ

ワバリを誇示するべく、社内パフォーマンスに余念がない。

おれは彼の背後からそつと近づき（正面から向かうと咬みつかれる恐れがあるため）、「どうしたの？ 紙でも詰まつた？」と、声をかける。

「『ペリー』じゃない。ファックスだ」と、ジエド。「見る、この発送伝票。これは地下のだろ？」大量の用紙を手に、しかめつ面を作つてみせる。書面を覗き込むと、それは確かにうちの部所宛てではないようだ。先方が番号を聞違えたらしい。

「つたく面倒くせえ。地下のやつらに取りに来いつて言つてやるか」受話器を取るジエドに、おれは「こいつ」と顔をかける。「おれが下に持つていいく」

「由やかすな」

「ちょうど外に『コーヒー』を買ひに行つたと思つてたところだじ」「じゃあ、今後はこいつことがないようひつて、地下のやつらに言つとけ」尊大に言つて、紙の束をおれに手渡す。

彼が言つている“地下”といつのは、このビルの地下一階のことだ。そこは倉庫になつていて、立体彫刻や絵画など、商品の保管室になつてゐる。“地下のやつら”といつのは、そこで作業している人たちのことで、彼らはおれたちのことを“上のやつら”と呼んでいる。同じ会社に勤務してはいるが、さきほどのジエドの態度が示す通り“地下のやつら”と“上のやつら”は、あまりいい友好関係を築けていない。ブルーカラー対ホワイトカラーの構図は、こんな身近なところにも存在していて、中でもジエドはあるつおりわかりやすいタイプの差別主義者だ。

保管庫は通年暗く、ひんやり冷たい空気が漂つていて、“上のやつら”は、あまり地下に降りたがらない。だからこそ、間違いファックスを「取りに來い！」といつ話にもなるのだが、それこそが“地下のやつら”的反応をあおる結果にもなつてゐる。ジエドはそうしたことに気付かないのか、それともそんなことはどうでもいいのか、平氣で“地下のやつら”にああした態度をとるが、おれにはそ

れは理解できない。どちらが偉いというわけでもないのだし、間違いつつアッ克斯を届けることで、『上のやつら』の何かが下がるというわけでもない。意味なく戦いたがるのは意味のないマッショウさ。ジェンダー論を持ち出すまでもなく、社内は平和な方がいいに決まっている。

ダンガリー・シャツに身を包んだ設営部の男性は、『わざわざ届けてくれて悪かったね』と、にこやかに礼を述べた。親しげに微笑んでいるが、椅子からは立たず、『そこに置いといて』と、スチールのラックを指差す。

おれが書類受けにアッックスを入れると、『アッックスを見つけてたのが、きみでよかつた』と、彼は言った。前髪は薄く、ぽっちゃりとした顔は人好きのする雰囲気だ。『これがもしアクロバットあたりに拾われたら、『上まで取りに来い！』って話になつただろうからな。手間がはぶけたよ』

「アクロバット？」

『ジエド・スミスのことさ。おれたちあいつを『アクロバット』と呼んでるんだ。似てるだろ、アクロバットリーダーの男に』さらつと言う彼に、おれは声を立てて笑つた。確かにジエドは、PDFソフトの起動時に登場するキャラクターによく似ている。

『ああ……それは最高だな。悪いけど笑える』

『ウケたぞ、ドン』彼が後方に向かつてそう言つと、黒い口ヒゲの男が片手を挙げた。

『このアダ名は彼がつけたんだ。あいつ、命名の達人だよ』

『へえ、他にはどんなのが？』

『『賢者の石』つてのがあつたな。最初は『ハリー・ポッター』つて名前だつたけど、そのうち『賢者の石』になつて、今はただ『石』と呼ばれてる。三階の業務課の……』

「ああ、誰のことがわかった。彼はうちの課でも“ポッター”で通つてゐるよ」おれがそう応えると、ブロンズで巻き毛の男が会話に参加した。「あいつ、映画が公開される前は何て呼ばれてたんだろうな?」

「もう忘れたよ」と、ぽつちやりが応える。「きつと母親からもポスターって呼ばれてるんじゃないか?」

「今や誰も本名を思い出せない」

「上は入れ替わりも激しいからな。いちいち記憶してられないよ。あ、でもきみの名前は知ってるよ。ディーン・ケリー。そうだよな?」

ボールペンの先端を向けられ、おれはちよつとビビりとした。努めて平静を装い「ええ、そうです」と答える。

「ちなみにおれはチャック・ニコルズ。以後お見知りおきを」そう言つて、片手をパチリとつぶる。「ファックスを届けてくれてありがとう、ディーン」

親しげに呼ばれたことに、おれは居心地の悪さを感じた。こっちは彼の名前を知らない。入社してからずいぶん経つところに、おれはこの三人のうち、誰の名前も覚えてないんだ。やれやれ、おれももう少しジエドを“見習つた”方がいいのかも。少なくともここにいる彼らは、“アクロバット”や、“ポッター”的ことを知つていた。“上のやつら”が思つているほど、“地下のやつら”は、“上のやつら”に無関心じやないのかもしれない。

「一ヒーショップでカプチーノを買つてゐると、背後から“やつときはぢうも”と肩を叩かれた。振り向くと、さつきの巻き毛の彼が立つていて、さつちやりでもヒゲでもない方。名前は不明だが立つていて。「どうも、奇遇だね」そうおれが言つと、彼は「そうでもないぜ」と笑つて応えた。「きみのことはこの店でよく見かけた」

「よく？」

「わりとじょっちゅう」

「そんなにサボってるわけじゃないんだけどな」

「わかつてる。きみはコーヒーを買つたらすぐに出でくからな」
そう言われ、おれは妙にドギマギした。見られてやましいことは何ひとつないが、こっちが彼の存在にまつたく気がついていなかつたことには、いくらか“やましい”に近い感覚を覚える。“わりとじょっちゅう”遭遇していたらしきおれたち。しかしおれはそのことをまったく知らなかつた。つまりそれだけ彼に無関心だったということだ。同じ会社の同僚なのに。

彼はアメリカンコーヒーを三つ頼み、「なあ、『ディーン』と言つた。それはずいぶんと氣をくな口ぶりだ。「きみって思つてたより普通だな。もつとずっとつきにくいと思つてたよ」

その「メント」におれは苦笑い。「よく言われる」と眞実を答えた。「チャックが“アクロバット”的アダ名をバラしたとき、おれは正直、やばいと思つたんだけど」

「やばい？」

「きみがジョン・スミスの同僚だつて知つてたからな。“チャックのやつ、よけいなこと言いやがつて！”とハラハラしてた。でもきみは聞いても少しも怒らなかつた。それどころか大笑いしたろ？」

「ああ」

「それで思つた。“ああ、こいつは結構[冗談が通じるみたいだぞ”

つて

「冗談の種類にもよるけど、おれはウケた……ねえ、ごめん、名前を聞いていいかな？」失礼を承知で訊ねる。目の前の男の名前、おれは何時間経つても、絶対に思い出すことはできないだろ？

「おれはマイク・ハドソン。設営部には十年以上いるよ」

これまでに何度も展示会場で顔を合わせていい彼。十年前から同じ会社にいる仲間の名前を知らないでいるのは、よく考えたらおかし

なことのように思えた。

ポールにそのことを話すと、彼は「ぼくはオフィスに勤務したことがないからわからないけど」と前置き、「会社ってそういうものなの?」と質問をしてきた。

「どうだろうな。おれもここ以外のことはよくわからないから」「ぼくの仕事だつたらあり得ない話だ。お密さんの名前はみんなすぐ覚えるし、ましてや仲間のだつたら尚のことだしね」

社員数で言えば、おれの会社はポールの店よりも、遙かに多い人數を抱えている。自分の仕事とあまり関係のない部所であれば、名前どころか顔だつて知らない可能性があるのは否めない。ポールの職場はアットホームで、お互いの名前どころか、家族構成や飼っている犬の名前も把握しているのが当たり前。性癖についてもおおらかで、ゲイであることを隠す必要もない。うちの会社でもカムアウトしている人はいるが、社内の全員がそれに理解があるわけではないことも、おれはよく知っている。もつと個人的に知り合つ機会さえあれば、「総務部のあいつはホモだつてな」と陰口を叩くよりもシな関係が築けることだろう。しかしそんな機会や意欲があつたといふ話は、残念ながらこれまで聞いたことがない。組織が繁栄し、巨大化することには、それなりの弊害もあるということ。たとえば、そう、“アクロバット”みたいな悪魔を生み出してしまつこととか……。

「もう、いいかげんにしろよ。」

今日もジョードは絶好調だ。コピー用紙を手にし、絶望的な顔で天を仰ぐ。「地下のやつら、コピー用紙をケチつて、わざとこっちにファックスさせてるんじゃないのか?」その身振りの悲劇的なこと。シェイクスピア劇もびっくりだ。どんな大事件かと聞けば、ファックスが“また”送られてきたとのこと。それは大変、911に電話

したほうがいいかな？

「じゃあ、おれが下に持つて行くよ」書類をジョドから取り上げようとするといふと、彼はそれを押しどどめた。

「もう行くな、ティーン。おれたちはナメられてる。」レインで示しをつけないと」言つて、受話器をとり、内線を鳴らす。「すぐに上がつて来い」と、居丈高に命令するジョド。それは聞いていて気分のいいものではない。

地下からやつてきたのはロビゲの男だ。彼はアダ名づけの名人。たしかドンとかいう名前だったと思つ。

ジョドは「こっちだつて暇じゃないんだぞ」と、ファックスの束を彼に突き出した。頭ひとつぶん背が高いドンを見上げ、ぶつぶつと口の中で文句を言つてくる。彼はどうやら、とてつもなくストレスが溜まつているらしく。とばつちりの被弾を受けたドンに、おれは“じめん”と田で合図。すると彼もまた表情だけで“気にするな”と返してきた。

会社とこう組織が嫌になるのはいつときだ。弱者と強者。それは役職とこうわかりやすいうべく、単純に階層分けされている。ジョドのような単細胞は確かに嫌われてもいるが、それでも社会的には認められている。スーツを着た馬鹿と、着ていらない馬鹿では、着ている馬鹿の方が、一枚（一着？）つわてとこうわけだ。

ドンは“気にするな”と言つたが（正確には言つたわけじゃない。そう見えたんだ）、おれは同僚の阿呆を加減を申し訳なく思つ。これだから“上のやつら”は悪印象なんだ。

外にドービーを置いに行くついで、おれは地下に降りてみた。ドンを見つけ、さきほどの“アクロバット”的態度について少し詫びる。すると彼は「別にいいや」と、本当にどうでもよさげな顔で言つた。

「わざわざつて言つたか……なんとなく気になつて」

「そうか、親切だな」

おれが親切になつたのは昨日からだ。以前だつたら、これくらいのことは気にも留めなかつたはず。わざわざ地下に来てみたのは、昨日ポールに「会社つてそういうものなの?」と聞かれたからだ。

“会社つてそういうもの”かどつかはわからないが、“ディーンつて奴はそういうもの”では、おそらくない。つまりそれは、“おれ自身がどういう態度を人に取りたいと思うかどうか”ということだ。組織の巨大さを自身のものと勘違いし、いち個人としてのありかたを忘れてしまつた成れの果てがジエドだ。おれはあはなりたくない。しかしそうなる可能性の芽は間違いなくあつたと思う。すでに築かれた仲間意識というのは楽なもの。『敵はあつちだ！ エイエイオー！』。仮想の敵は男たちの団結を強くする。巨大になりすぎた組織にまつわる弊害。それをのさばらせないためには、個々が意識的になつていくしかないのだと、おれは“アクロバット”に教えられているのだ。

上のフロアに戻ろうとしたとき、倉庫の奥から人の話し声が聞こえてきた。

「……だからや、絵に傷があつたのはおれたちのせいじゃないってあれほど言つてゐるのに。最初の額装に問題があつたんだろ?」

「そりや、おれもそう思つけどさ。運んでるうちに破損つて話なら

保険の種類が違うからそういう理由にしたんだろ」

「おれたちの名誉は金に換算できないぞ……あれ、ディーン?」

にぎやかに愚痴りながら登場したのはチャックとマイクだ。

「最近よく会つた。今日はどした?」とマイク。おれが答えるより早く、ドンが説明をかつて出た。「上に間違いファックスがまた届いた」

「あれ? また?」

「先方にちゃんと言つたのか?」

「ああ。むこうにはメールしといたんだけど

「メールじゃ駄目だろ」ドンはあきれ顔を見せた。

「それでディーンはここに? ファックスを届けにきててくれたのか

？」

「彼はファックスじやなくて、謝罪を届けにきたんだ」

「なんだ？ それってどういう意味？」

ドンはさきほどまでの顛末 アクロバットが怒鳴ったところから を説明。話を聞き終えたマイクとチャックは、同時に「へーつ」と言って、おれを見た。

「上の人間にも親切な奴つているんだな」と、チャック。居留地のネイティブ・アメリカンが、“いい白人”に会つたときのようなコメントだ。

「なあ、だからディーンは見かけとは違うって言つただろ？」「マイクは嬉しそうにチャックの肩を揉んだ。“って言つただろ？”ってことは、ここでおれの話題が出ていたってことか。この様子から察するに、どうやら悪い噂ではなさそうだ。

チャックは笑い、「イケメンでもいい奴はいるんだな」と言つた。「『すべてのイケメンは死すべし』という信仰を、おれは今日限りで捨てることにするよ」そう言つて、おれの手をしっかりと握る。さつきのドンの説明が、感動的かつ、オーバーにつづられていたとはいえ、一人の反応は極端かつ、オーバーだ。それだけ“上のやつら”に偏見を抱いていたということだろう。

マイクは腕組みをし、「すべてのイケメンは死すべし？ どんな宗教だそれは」とチャックに聞いた。

「いいだろ。おまえも改宗するか？」

「いや、おれはまだ死にたくないから」

「なにが？」

「イケメンとしては命の危険を感じる」

「なんだそういうことか。安心しろ、おまえは一万とんで二三百五十

パーセント大丈夫だ」

「どこからその数字が出たんだよ！」

デスクに腰掛けて笑いあう彼ら。マイクの台詞を借りるとすれば

“ああ、こいつらは結構冗談が通じるみたいだぞ”。地下は思つて

いたより普通のところ。もつとずつとじつときにくこと思つてた。
今はそう忙しい時期ではないからとこじつとを差し引いても、"上のやつら"と比べれば、"この馬鹿ばすいぶん"とラックスしているように感じられる。

「そうだ、ドン。こないだの負け分、いま払つておくよ」チャックがポケットから財布を出した。

「いつでもいいのに」と、ドン。

「財布に金があるうちに渡しておかないと忘れるからな」

なんだろう、まさか会社で賭け事はないよな？

「なに？ スポーツくじ？ おれが口を挟むと、ドンが答える。

「ポーカーを」

ポーカー。トランプゲームか。

「金曜の夜はいつもポーカーだ」ドンは金を受け取り、「これは先週、チャックが負けた分」と、札をひらりとしまい込む。

「ディーンはポーカーは？」と、マイク。

「得意かどうか……やつたことないからな」おれがそう答えると、チャックが叫んだ。「ポーカーをやつたことないって？ まじかよ？」

？！」彼の顔はにっこにこ。とても嬉しそうだ。

「ルールは知ってるけど、賭け事はあまり

「好きじゃない？」

「つていうか、よくわからないな」

「じゃあどうだ、試しにやつてみないか？」ドンがそう提案すると、チャックは「なに言つてんだよドン」と軽い笑い声をたてた。「彼はおれたちみたいな"ダサい子"とはつきあわないので！」言つて、くまのパーさんのように腹を突き出す。自虐と嫌味が混ざったコメントに、おれは思わず「そんなことないよ」と反論（まあ、少しはダサいとは思つてゐるけどさ）。「ポーカーは今晚？ ビーに行けばいいつて？」

「やつた！ カモん、カモちゃん~」

「チャック！」犬を叱る要領で、ドンが大声を出した。「この馬鹿

のことは気にするな。ポーカー会場はおれのうちだ。川むこうだから、車で連れていぐことになるけど。それでもよければ」

「うん、お願いするよ」

かくしておれは、彼らの仲間になつた。このときはまるで意識していなかつたけど、関係性の始まりなんて大概そんなもんだ。

丸テーブルを囲み、カードを切る。外国のビールを飲みながら、くだけた会話。しかしあお互いの顔色を盗み見ることは決して忘れない。これで肩つりに拳銃があればハードボイルドの世界だが、おれたちは至つて普通の小市民。イカサマもなけりや、負けてピストルを抜くこともない。賭ける金額は小銭程度だ。

おれが首尾よくチップを集めると、ドンは「ほんとうに初めてなのか？」と怪訝に言つた。

マイクも頷き、「そうだな、ディーンはけつこう強い」と同意。「ルールもちゃんと知つてたし」

「子供の頃はたまにやつたんだ。姉貴とその友達と。弟の小遣いでマニーコキアを買あうつて算段だから、彼女たち、そりやあ真剣だったね。それ以来、賭け事とは縁遠いんだ」

「無情なギャンブラーに身ぐるみはがされたつてわけか」

「つらい過去だな……一枚くれ」

「おれは降りる」マイクはカードを伏せて置いた。

「また降りるのかよ」

「賢人は馬鹿をやらない」

「臆病者もな」そう言つてドンは葉巻を口にくわえ、ライターをばちんと鳴らして開けた。自分の葉巻に火をつけ、そのついでにおれのタバコにも点火してくれる。

おれは煙を吐きながら、皆の顔を見て言つた。「全員が吸うなんて珍しい」

喫煙者は肩身が狭いマンハッタン。未だ火と煙を愛する者がこの部屋に四人（全員だ！）もいるとは驚愕の事実だ。

「喫煙所はおれたちのたまり場さ」と、マイク。「きみは見ないな

「あそこでは吸つたことないんだ」

「おれたちはいつも喫煙所にいるぜ。今度来てみるといい」「ドンはビールをプシュウッと開けた。

おれたちの手にはビールとタバコ。女は抜きで、会話は進む。煙が充満する部屋には、男性ホルモンも過多に充満中。数日前まで名前も知らなかつた彼らだが、こつして一緒にいるうち、段々それぞれの性質も掴めてきた。

おれの右隣に座つているのは、メンバー内で唯一の既婚者であるチャック。性格はひょうきんで、体型はふんわりといふか、ぽつちやり。子供向けの映画には必ずひとりいる、キャンディバーをムシヤムシやつているようなタイプだ。

左隣、口ヒゲのドンはアダ名つけの名人。性格はクールで、言葉は辛辣。おれも以前は妙なアダ名をつけられていたんぢやないかと思うが、彼の眼差しは妙に鋭く、真相はとても聞けやしない。

向かい側の席は、設営部に十年以上いるというマイク。プロンドの巻き毛はとても豊かで、ハゲの心配は永遠になさそう。どこの政党も支持しないという彼はノンポリで、強いて言えば分がいい方につくとのこと。争いことは嫌いみたいだ。

まるで漫画の世界に飛び込んだようなキャラクターたち（まあ、いつものメンバーもそうとう濃いが）。彼らといると普段は耳にしないような言葉が急に飛び出し、こつちがリアクションに困ることもしばしば。たとえばゲイにまつわるキツイ冗談。これにはいささか閉口だ。以前だつたら笑えたのかもしぬないが、今のおれには少しも愉快とは思えない。皆に悪意がないのはわかっているが、ディーン・ケリーの中には存在する“ゲイな部分”には、確実に傷がついている。とはいえ、それはさほどの大きさではない。フロントガラスにへばりついて死んだ羽虫で、不快感としちゃ小さなもの

だ。

時計の表示が0時に近づいたところで、おれはソファから上着を取りつた。

「おれ、そろそろ帰るよ」
するとチャックは両手を広げ、「ディーン、冗談だ！」と手をむいて見せた。「勝負はまだまだ、これからじやないか」

「どうせ明日は休みなんだ。朝までいろよ」と、ドン。視線はカードから逸らさない。

「チャックは奥さんが待ってるんだろう？ こんなに遅くなつて平氣なのか？」ジャケットに腕を通しながらおれが訊くと、チャックは「今帰つたら、女房まだ起きてるからな」と言つた。

「葉巻のにおいをブンブンわせて帰つたら、ベッドに入れてもらえないとか？」

「そりゃいいな。葉巻食つて帰るか」チャックはチップをテーブルに置いた。

「きみの彼女はそうなのか？ ベッドに入れてもらえない？」カードを見つめながらドンが聞く。

「そういうわけじゃないけど……」襟元を直しながら、言つよどむ。
“彼女が”じゃなく、おれは自分が臭うのが嫌なんだ。服はクリーニングに出したいし、シャワーも浴びたい。しかしそれを説明するのは控えたい。なんとなく。

ドンはぶかーっと煙を吐き、「誰に遠慮することもないだろ」と言つ放つ。「“これがおれの匂いだ！”って、堂々としていればいい

いや、これは“おれの匂い”じゃないんで。
「ドンは女に迎合しなさすぎなんだよ」と、マイク。「今どきそれじゃまずいだろ」

「葉巻がおれのフレグランスなんだ」

「意地つぱりめ。ティーンを見ろよ。いつも何やらマイク匂こせってるわ。最近の流行りはこうこう男なんだ」

「イイ匂いねえ……」意味ありげに微笑むドン。「背後に立つたら、女と間違えたりして」

おつとと……嫌な矛先がやって来たぞ。

「いいんじやないの、好みは人それぞれだし」マイクはおれの肩をポンと叩いた。「ティーン、おれも帰るわ。一緒に出よ」

タクシーを捕まえられる通りまで歩く道すがら、マイクは突然、何の前振りもなく「きみつてあんまり男と付き合つたことないだろ」と言つてきた。

「え？　え？　男と？」今現在“彼氏”のいるおれにこの質問。何をどう言えばいいのか、面食らつていると、マイクは「ほらそれだと笑つた。「そのリアクション、さつきも何度か見たよ。きみは時々おれたちの会話について来れてなかつただろ？」ニヤリとするマイク。確かに、彼の指摘は間違いではない。

「ずつときみといて思つたね、“こいつは男慣れしてないな”つて。おれの学生時代にさ、きみみたいな奴つてやつぱりひとりくらいいたんだよ。女とばっかりうまくやつてて、男とはあまり馬が合わない。そういう奴は卒業後、ゲイバーとかに勤めたりしてたけどさ。ああ、変な意味じやないぜ。気を悪くしないでくれよ」先回りして弁護するマイク。ゲイバーの部分はともかくとして、彼の言わんとすることはよくわかる。実際、おれは学生時代、あまり仲良くできる男友達というのがいなかつた。フットボールやガレージロックに興味のあるティーンエイジャーの中で、おれは美術やファッショングの本を読んでいたのだから、当然馬など合つわけもない。それでもおれのことを“オカマ野郎”と罵倒する者がいなかつたのは、おれが女にもてたからだ。もしもティーンをいじめたら、そいつは女子から嫌われる。学生時代に喧嘩を売られることができなかつたのは幸いだが、コミニケーションを積極的にとつてこようという男子生徒

は、やつぱりそう多くもなかつた。

「なあ、マイク。きみはおれのことをとつときとつて言つてたけど、実はじつも同じように思つてたんだ」

「おれが？」と、自分の胸を指すマイク。

「いや、きみたちが」

「おれたちがとつときにくいつて？ なんでもまた？」

「だつていつも固まつて一緒にいるし、『上のやつら』のことは避けた」

「別に避けてるなんてことは……」

「おれのこと、『一ヒーショップ』で、『ショッちゅう』見かけでも、きみは声もかけてくれなかつたしね」先手を打つてそう言つと、彼は「そりやまあな、ちよつとは避けてたかも」と否認を翻した。「でもじつちの気持ちもわかつてもらいたいね。きみは女子社員にモテモテだし、いつもかっこいいスースを着てるだろ？ 表舞台の課とは違つて、会場設営部は地味なやつらばかり。怖じ氣づくのも仕方ないつてものを」マイクはひょいとクビをすくめた。

“地下のやつら”が、“上のやつら”に引け目を感じていただつて？ それはずいぶん意外なことだ。会場設営部はいつも『あつちはあつち、じつちはこつち』という態度を貫いていたし、いい意味でも悪い意味でも、“上のやつら”を気にしているそぶりは何ひとつ見られなかつた。しかし今のマイクの言い方からするに、これは本当に正直な本音なのだろう。

「そんなんふうに思つてたなんて、ちつとも知らなかつた」おれがそう言つと、彼は「だらうなあ」と、納得したように頷いた。

「それに……おれが女子社員にモテモテだつて？ それもちつとも知らなかつたよ」

「はは、知らぬは本人ばかりなり、か？ チャックなんかあんまり羨ましいもんだから、女子社員がきみを褒めるたびに、『ディーンはゲイだ』つて説明して回つてるよ」

「…………それもちつとも知らなかつた」

「まあまあ、今度からチャックも改めるだろ。きみがおれらの仲間になつたんだからな」

“仲間” その言葉には微妙に違和感があるが、ボーアイズ・クラブにはそうした連帯感が必要なのだろう。タバコに火をつけ合う。朝まで一緒にいたがる。同じ酒を酌み交わす。仲間だと宣言する……。どちらかと言うと、こいつはセンスの方が、本物のゲイよりも、ずっと“ホモっぽい”ような気がするが……まあ、彼らがゲイってことは、まず七割方あり得ない。むこうもおれのこと『ゲイつてことは、まず七割方あり得ない』と思つてゐるかも知れないが……。

おれの推測した彼らの“ノンホモセクシャル・パー・センテージ”が、七割から八割に変わつたのは翌週のこと。チャックから「今夜は女のエネルギーを浴びてリフレッシュしよう!」という提案を切り出された瞬間のことだった。

「いいストリップバーを知つてゐるんだ」 そう言つて、とびきりの笑顔を浮かべるチャック。

思わずおれは「ストリップバー?」と、聞き返す。

「酒とツマミがとびきり安い店なんだよ。ちょっとした穴場だ」

「だつて……チャックには奥さんがいるじゃないか」

「そうや」 しつつとしてチャック。「だから行くんだ」「当たり前だろう」と言わんばかりの態度。實に堂々としているため、突つ込みどころがわからない。

「ティーンがいたら、おれたちもちょっとはイケてるグループに見えるかもね」 そのチャックの言葉に、ドンは「そうだな」と頷いて「おまえがタバコでも買いに出てる間は」と付け加えた。

「モテ系メンズはこういうとき何着てくんだ?」マイクが聞くので、おれは正直に「わからない」と答えた。「ストリップバーなんて行

つたことないから

「なんだよ！」チャックが叫ぶ。「ポーカーだけじゃなく、ストリップバーも初心者なのか？！」

ピーツ！ ホイツスル！ 2ポイント先取！ 彼はやたら嬉しそうな表情をしている。

マイクは頭を振り「マジかよティーン」と言い、続けてドンも「やれやれ、青春時代は何して遊んでたんだ？」と、あきれ顔。なんだろ、ストリップバーに行つたことないって、そんなひどいことなんだろうか。

おれはちょっとムツとし、「行くのは構わないけど」と突っけんどんに承諾した。「その前に一度、家に戻つて荷物を置いてきてもいいかな。週末は家で仕事するつもりだつたから、データをどうしても今日中に持ち帰りたいんだ」

「持ち帰りで仕事か。やつぱり“上”は大変だな。いいよ、おれたちは近くで軽く時間をつぶしてから行く。後で合流しよう」

大急ぎで自宅に戻り、書類の入つたカバンをベッドに放る。さて、ストリップバーには何を着ていつたらいいんだろう？ よれよれのボウリングシャツとバミュー・ダパンツ？ ……わざと変な格好することもないか。

クローゼットからシンプルなシャツとパンツを選び出し、廊下に出たところでポールとばつたり。

「出かけるの？」

「あ、ええと。うん

ポールはくすっと笑い「“あ、ええと”って何？」と、おれの举动を指摘した。それから一番聞いてほしくない質問をひとつ。

「どこ行くの？」

“出かけるの？”“どこ行くの？”“どちらもシンプル極まりない、

Wで始まるクエスチョンだが、今日に限っては答えにいく。

「ちょっと飲みに。こないだの同僚と」

「そう、遅くなる?」

「ああ、先に寝てくれて構わないよ」

それじゃ、と素早く出ようとしたところ、不意にドンの言葉が
フラッシュバックした。『誰に遠慮することもないだ。堂々とし
ていればいい』。

遠慮? おれは何か遠慮しているのか? 今の態度は堂々としてない? そうかもしれない。口ソコソ出でにこうなんて、男らしいとは言えない気がする。それによく考えたら、隠すことでもないか。別に浮気しに行くわけじゃない。ストリップバーくらい誰でも行つてる。(おれは初めてだけど)。

改めて“どこに行くか”を正しく伝えたところ、ポールは「ストリップバー?」と、怪訝な顔をした。「女の?」

不信感のある声に尋ねられ、おれは「えーと.....たぶん」と、あいまいに返答。このあたりはあまり男らしくはない。すわ、怒鳴られるかと思いきや、意外にも彼は「そつ、行つてらっしゃい」と言つただけだった。

「.....いいのか?」

「仕事の付き合いなんでしょう?」

「ん、まあそうだけど.....」歯切れの悪いおれに、ポールはすまし顔で言つ。『きみのことだから、どうせすぐ飽きるに決まつてるよ』

「飽きなかつたら?」

「ひつぱたいて目を覚ませる」

「.....すぐ飽きるよう努力するよ」

「行つてらっしゃい、これは魔除けだ」と、おれの額にキスをする。恋人を笑顔でストリップバーに送り出すなんて、彼は素晴らしい心の持ち主だ。あわてず騒がず、冷静沈着。もしかしたらおれの知つている人間では、彼が誰より男らしいと言えるかも。葉巻もカードもやらないが、今夜のポールはすいぶんと男っぽく見えた。

赤、青、紫の順に替わる舞台照明。スピーカーから割れた音が鳴り響く中、女性たちはステージから挑発的な視線を投げかけ、少しでも多くのチップを得ようと努力をする。チャックはとても上手に指笛を吹いたが、思つたとおり、おれはここでは性的な興奮を得ることはできなかつた。女の子たちが魅力的じゃないというわけではない。ただなんというか、おれはどうしても、彼女たちの人生の背景に思いを巡らせてしまうのだ。若く美しい女性たち。それが好きでもない男たちに裸を見せているのは金のためだ。どういう理由があるのかは知らないが、そこには間違いなく彼女たちの生活がかかつてゐる。小さな子供がいるかもしないし、年老いた親を養つているのかも。そこを考えると「キゲンに酔つぱらうことは難しいし、ましてや口笛を吹く気にはどうにもなれない。こんなことを思われるより、普通に楽しんでくれた方がダンサーにとつては嬉しいんだろうが……おれはどうも駄目だ。セックスを売り物にした産業は、もともとあまり得意じやない。それにしても、ここまで楽しめないとは思つてもみなかつた。もしかしたらポールの魔除けが効いているのかもしねない。

「なあ、おまえはどの女がよかつた?」
「おれはカーリー・アガーフーが一番だつた」
「てゆうか、一番田に出てきた女!」
「あれはないよな! 乳輪でかすぎ! 胸の形は悪くないのに!」
「あの巨乳? あれは偽だろ?」
「シリコンじゃないじゃない女なんて、あそこにはいないよ」
「そりやあ?」

「貧乳はストリップバーで働けない」

「谷間でチップを挟めなきや意味ないからな」

「ペーパークリップかよ？！」

「爆乳の使い道つて他にあるか？」

「デスクに乗せてペーパーウェイトにする」

「だからうちの社長秘書は乳デカイんだ！」

店を出た途端、シヨーの感想を一気にまくしたてる彼ら。男がおしゃべりじゃないなんて、いつたい誰が言つたんだろう？　おれはといえば皆から一歩離れ、外の空気は気持ちがいいな、なんてことを考えている。

「ディーン、さつきから静かだな？」マイクがあれに話しかける。「きみはどの女がいいと思つた？」

「みんなきれいだったよ」おれがそう言つと、ドンは「“みんなきれい”か」と、こだまのようすに言葉を返した。「なあ、ディーン、ああいうところでは、誰かひとりお気に入りを決めた方が遊び易いつてもんだぜ？」そもそもきみは全員にチップをやり過ぎなんだよ。田当ての子をひとりかふたりくらいに決めないと、チップで破産しちまうぞ」

「だつてあんなに一生懸命踊つてるんだし。そもそも彼女たちの生活はチップで成り立つてるんだろ？」

「生活つて……そんなこと考えてチップやつてたのか？」ドンはまたしてもあきれ顔。そこへチャックがフォローに入った。「ま、ま、彼もそのうち慣れる。安心しろよ、ディーン、おれがきつちつ指導してやるからさ」

「氣をつける。チャックに指導されたら服のセンスが悪くなるぞ」マイクの言葉に、チャックはすぐさま「子馬もようのネクタイしめた奴に言われたくないね」と、反論する。

「子馬は流行りだ」と、マイク。

「牧場ではな」

相変わらずの氣そくな会話。それでもおれは笑えない。どうやら

“女のエネルギーを浴びてリフレッシュ！”とはいかなかつたようだ。

「よし、ディーン。先週の負けを取り戻すぞ」ドンがおれの肩を抱いた。ポーカーゲームのお誘いだ。

「いや、今日はやめておくよ。ちょっと疲れた」

「そうか、まあいい。でも次の週末は野球だぞ。忘れるな

「ああ、もちろんだ」

家に帰るとポールはまだ起きていた。おれのためにハーブティを淹れてくれ、「ストリップバーはどうだった？」と聞いてくる。おれは「思つたより疲れたな」と、低いテンションで素直に答えた。するとポールは満足そうにニンマリ。“やつぱりね”といつ顔をしてみせる。

「ポーカーにストリップ。次はどんなことにチャレンジするの？」
と、ポール。

「週末は野球だ」

「急に健康的になつたね」

「いや、やるんじやない。見るんだ。メジャーリーグのチケットをマイクが手配してくれたから」

「ブーリングと野次の練習を？」

「いいや、それはしない。発声練習ならもつといい方法があるぜ」
おれはポールの腕を引っ張り、彼の身体を抱き寄せた。

「疲れたつて言つたくせに……」腕の中でポールがさわやく。

「それとこれとは話が別だ」

「わかった。じゃあ、ぼくが朝まで叫ばせてあげる」

そう言つ彼のキスはとても素敵で、ブーリングと野次の練習には到底なりそうもない。

ベース・ルースゆかりの球場は今日も満員。ホームチームを応援する人々の熱気は激しく、開始前にもかかわらず「ゴー！ヤンキー！」のかけ声が聞こえてくるほど。ニューヨークに生まれ育つて、この空気が嫌いな少年はないはず。おれが人生で初めて訪れた球場も、もちろんここだ。しかしそうとは知らないドンは、おれに向かって「ルールは知ってるよな？」なんて言ってのける。

「子供の頃にはプレイもしたよ。スクアブックのつけかただつて知つてる」

「きみは野球よりバスケの方がと思った。ばかに背が高いし」

「ドンは子供の頃にどんなスポーツを？」

「おれはチエスだ。ロシアからの留学生を打ち負かしたこともある。運動は向いてなかつたな」

手荷物検査を通過し、ゲートの入り口を探していると、マイクが「ちょっとディーン」と、呼び止める。

「あれ、おまえを呼んでるんじゃないの？」言われて振り向くと、妙に派手なグループが、おれに（たぶんおれに、だ）向かって手を振っている。

「ディーン！ ハーロー！」

「お久しぶりー！」

「元気いーーー？」

それはいつものパーティ狂のメンバー。モナとキャロリンとマリリンだ。

「何だあれは」と笑いだすドン。

「でかい声だな」とマイクが言つ。

彼らが周囲の人々の注目を集めているのは、何も声のデカさだけに限つたことではない。かぶつたベースボールキャップにはフリフリのお花。コスチュームのベースとなつているのはチームカラーのストライプだが、ぴつたりしたブーツとミニスカートは野球とはま

るで無関係。太ももには各自、好きな選手の名前がペイントされ、応援の気合いを物語つている。

三人はおれに駆け寄ると、嬉しそうな表情でしゃべりだした。

「まあ、ディーン。あなたもヤンキースのファンだったのね」「こんなところで会うなんて、何だか妙な感じだわ」

「こちらの方たちはお友達かしら?」

おれが同僚を紹介しようとすると、ドンは突然「いや、こいつはすごい」と、大声を出した。「これだけ目立てば絶対にカメラに抜かれるだろうな」感心したように両手を広げ、「選手が萎えて負けなけりゃいいが」と皮肉を言つ。

「相手チームに対するプレッシャーをかけるにはいいんじゃない?」そうマイクが返すと、チャックは「シアトルの奴らはオカマばつかりだから大喜びだよ」と言つて笑つた。

これはいつもの軽口だが、口さがない会話になれていないモナたちは、戸惑いの表情を浮かべている。

「ごめんよ、ガールズ。別に悪気はない」おれが詫びると、マリンはパツと表情を明るくし、「あら、いいのよディーン」と手を振つた。「わたしたち気にしてないわ」

「そうよ、慣れっこだもの」モナもにつこり笑みを作る。

「“ガールズ”ね……」と、ドンがつぶやく。「ところでディーン、きみの“ガール”は、どれなんだ?」

彼の言葉にどつとウケるマイクとチャック。「そつだな、せつかぐだから紹介してくれよ!」

彼らのジョークに悪意はない。それでも人を傷つけることはできるだろう。おれを侮辱することについては、フロントガラスにへばりついた羽虫ていどのことだが、ガールズたちからすれば、これは羽虫どころではおさまらない。全人格を初対面の人間に否定されることが、どれほどのことか、この“ボーアイズ”は、ちつともわかつちゃいないんだ。

おれはガールズとボーアイズの間に立ちはだかり、「おれのガール

フレンドは「ここの中にはいな」¹と宣言する。「いたとしてもさみたちには紹介しない」

「なんだって?」マイクが顔をしかめた。

「きみたちの差別的発言には、もううんざりだ」

「おいおい、そりゃジになるなよ。ほんの[冗談だろ?」ドンは笑顔だ。おれは少しも笑えない。

「冗談を言いたいのなら、もつとセンスを磨いて欲しいよ。少なくとも誰も傷つけなくて済むようなやつを」

「ディーン、いつたい何をそんなに怒ってる? おれたちが何したって言うんだ?」

「おれの友達を侮辱したじゃないか」

「だから何だ? そっちの奴は“気にしてない”と言ったんだぜ! ?」

「おれは気にする。あんたが気にならないというのが不思議なくらいだ」

「なんだと?」Jr.ちが下手に出てるからって……」

「おい、やめる」ノンポリのマイクが割って入った。「なんだかよくわかんないけど……どいつも険悪だな。とても一緒に野球を観る雰囲気じゃない」

おれが黙りこなしてると、マリリンがそつとシャツの袖を引つ張った。

「ね、ディーン、あたしたちこれから選手控え室に行くの。あなたも一緒に来ない?」

「バックヤードバス持つてないぜ?」

「あら、そんなのいいのよ。ちょっと弟を激励に行くだけだから」

「マリリンの本名はマイケル・ジョンソンよ」とモナ。「投手のケニー・ジョンソンのお兄さんなのよね」

「まじか」そう言つたのはチャックだが、おれもまったく同意見。

「ケニーがちっちゃかった頃は、あたしがキャッチボールの相手をしてたのよ」マリリンは得意げに胸を張った。

「この子つたら、今でもいい肩してるのよね」「今や握ってるのは、別の玉ばっかりだけど

「失礼ね！」

「固いバットも一緒にでしょ？」

「夜のホームラン王！」

「おげれつ！」

「これもまたいつもの軽口だ。それでも不思議と嫌な感じはしなかつた。

「行きましょ、ディーン」マリリンがおれの腕に腕をからめた。

「ボールにサインしてもらえるかな？」

「もちろん。他の選手のも頼めばもらえるわよ

「だったら商店に寄らないとね。ボール、持つて来てないでしょ？」

「ディーンは持つてるわよ。このなかで持つてないのはあたしだけ

」

「そんなに玉抜き手術が自慢つてわけ？」

「嫌味よねえ」

「にぎやかに選手控え室に向かうおれたちの背後で、『ボーアズ』の声が聞こえた。

「おれもよかつたら弟さんこ……」

「よせ馬鹿つ！ みつともない！」

彼らの姿がすっかり見えなくなつたあたりで、マリリンはおれの腕を搔きぶり「ねえ、ディーン」と、小さな声を出した。「さつきはありがとね。あいつらの前だから意地はつて平気な振りしたけど、ほんとはわたし、とつても傷ついてたの」言つて、身体をおれに寄りかかるせる。「あんなふうに立ちはだかつて、わたしたちを守つてくれる……それってなかなかできる」とじやないと思つ。泣いてしまいそうなくらい嬉しかつたわ。ディーン、あなたは男の中の男よ」それから、ほんの少し背伸びをし、おれの脣に軽くキスをした。

「あらヤダつ！ この子つたら、なにやつてんのー」マリリンの所業を鋭く見咎めるキヤロリン。するとマリリンは「こーのー、感謝

のキスなんだから！」と言い、おれに抱きついた。

「じゃあたしも！」モナが後に続こうとするが、「あなたのセク

ハラよ！」とマリリンが怒鳴る。

「なんであんたばっかり！ あたしだってキスしたいわよー。」

「おやめっ！ みつともない！」

「自分ばっかりするいじやないよー。」

やたら力強い“ガールズ”の強引な感謝。全員から機関銃のようなキス攻撃にあって、さつきのグループに戻りたくなつたろうつて？ まあ、いつものおれならそう思つたかも。しかし今回だけは別、“チーム・マツチヨ”に戻るくらいなら、ここで“感謝のセクハラ”に甘んじていたほうが全然マシだ。なべて世はこともなし。おれにとつてはいつもが浮き世だ。

サインボールを天井に放り、落ちてきたところをキャッチ。また投げて、キャッチ。それを繰り返しながら、おれは言つ。

「きみの予言通りだ」 ボールを投げる。

「なにが？」と訊くボール。

「すぐ飽きた」 キャッチ。ボールの縫い目を指でなぞり、「おれはもともと野郎っぽい奴とは馬が合わない」と説明。「少しあはわせた方がいいのかなつて、今回思つたんたけど、なんだかまだ時期尚早だつたみたいだ」

「いいんじやない？ 無理しなくても」

「煙にまみれてポーカーをするより、きみと家でゲームでもやつていたほうがずっといい。これが本音だな」

「きみがストリップ狂いにならなくてよかつた」

「なるもんか。セックスをショーにするのはおれは好きじやない。きみはそのことを知つてて、“行つてらっしゃい”って言つたんだろ？」

「まあ、そつかもね。さてと、じゃあやる?」

「やるつて何を?」

「ゲーム。モノポリーのボードがどつかにしまつてあると思つけど

?」

ポールはホテルをいくつも建てて、鉄道会社を買い占めた。彼の手腕に ore の計画は飲み込まれたが、そんなことは気にもならない。恋人に打ち負かされることの心地よさ。彼はとても頭がいい。そのことを知つて、おれは嬉しいとさえ思つ。

おれとポール。生物学的にはどちらも男。だつたらこれ以上“男っぽく”することに、いつたいどんな意味があるだろう? ポールの振るまいはいつも自然で、そこには素敵な男らしさが感じられる。マリリンは心ない言葉に傷ついていたが、それを気づかせまいと笑顔を見せた。纖細なハートと思いやりは母性的と言つてもいいだろう。ド派手な衣装は他人が見たら不自然に思うかもしぬないが、彼女にとつては自然なことだ。なにが自分自身かは、本人にしかわからない。無理することなく、型にはまることなく、おれたちは居心地のよさを見つけ出していく。

おれはおれが気に入つた空間にいて、そこには間違ひなくポールの存在がある。居心地のいいソファと皿いコーヒー。ついでにモノポリーのひとつもあれば、だいたいハッピ。欲しいものはすべてこの家の中にある。探しに行く手間が省けたのは幸いなことだ。

END .

作者注

ヤンキー・スタジアムは今年から新しくなるので、“ベーブ・ルースゆかりの球場”という表現は（これを2009年の物語とするならば）間違つてゐるわけです。でも古い球場に愛着があるので（行った事はありませんが）ここはそのままにしておきます。

(後書き)

最後までお読み頂きありがとうございました。

もしよろしければ、ご感想など頂けると幸いです。

本作品は「Hピソード16：不信と嫉妬（Hug Up）」
<http://nicode.syosetu.com/n3545/>に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0320g/>

ニューヨーク・ラブストーリー/エピソード15:男の中の男 (Express Yourself)

2011年8月15日03時24分発行